

# 視覚的言語のかなたへ

—『告白』第七卷第十章一六節・『詩篇講解』第四一篇—

加藤 武

## 序

いわゆるミラノのヴィジョンをしるした『告白』七・一〇・一六を中心にとりあげる。随時、アウグスティヌスの『詩篇講解』第四一篇<sup>(1)</sup>のなから、若干の箇所をあわせて比べる。

ミラノの経験において、すでに、イデア的言語のかなたへ向かう。イデア的言語のかなたへ向かうとは、なにを意味するのか。

見ると知るとは、ふかいつながりをもつ。いったいミラ

ノの経験において、知るとはなにか。

## 第一章 見ることから

### 第1節 視覚的言語の多用

アウグスティヌスは、『詩篇講解』第四一篇の表題に、*in intellectum* (理解に向かつて)、とあることに注目している。「この詩篇はかれら(コラ、ヘブライ語でコラハ、レヴィの子孫)と呼ばれる子たちのために、理解に向かつて、つまり歌の意味が分かるように、歌われるのです」。

『詩篇講解』四一・二<sup>(3)</sup> この詩の解題のなかに、見るとか、分かるとか、にかかわる視覚的な言語が多く現れるのであ

る。<sup>(4)</sup>このような用語の多用が見られる。おなじことは、『告白』七・一〇・一六にみられる。vidi, lumen, scire, cognovi, aspectus など。

## 第一章第2節 見ることから

ミラノの経験『告白』七・一〇・一六を、テキストに即して、順に辿ろう。ここでは、見ることと知ることの、切り離すことのできないつながりを、見てゆこう。

[A] そこで私は、それらの書物から自分自身にたちかえるようにすすめられ、あなたにみちびかれながら、心の内奥に入ってゆきました。<sup>(5)</sup>(加藤信朗訳、一七三頁、テキストは Skutella 版による。140, 18—20)

自己への還帰が、簡潔に述べられる。神が先導し、助け手になった、とあるが、これらをどこまで重く受け止めるか、あらそわれる。筆者はこれを重く受けとめる。これは単なる孤独な経験でなく、いわば神が親しく伴走するまれな経験と、とるからである。さらに、この自己への還帰の物語が、はたして〈神秘的な経験〉をのべたものか、たんに〈知的な理解〉の円盤に乗っているのか、二十一世紀を

むかえた今日なお、世界の研究者において一致を見ない。たとえば、比類なき感受性において卓越するフランスの Olivier du Roy<sup>(8)</sup> は、神秘経験と見る (77, 3)。

かれはアウグスティヌスにおいて、神秘経験とは、「自己をなりたたせる神の充溢せる現前」をさす、と見るのである。とはいえ、その際、ドグマ的な神秘神学の伝統的なカテゴリーに、安易にあてはめ、分類することに対しては、きびしく批判する。これにたいして、神秘経験と知的な理解を互いに排除することが困難である、とみる一人は、アメリカの、テキストの読みにおいて周到で、想像力に富み、論理的分析において鋭い Robert J.O'Connell<sup>(9)</sup> である。(とはいえ、神秘経験よりも知的解釈のレベルで理解しようとする傾きが、見え隠れするが)。筆者は、神秘か理解か、あれか、これか、いずれか、と早計に断定することには、反対である。見るといふ経験と、それを理解することと、いずれも相補的であるのではないか。次のパラグラフに進もう。

[B] intravi et vidi quaecumque oculo animae meae, supra eundem oculum meum, supra mentem meam, lucem incommutabilem. 私はそこに入ってゆ

き、何かしら魂の目のようなものによって、まさにその魂の目をこえたところ、すなわち精神の目を超えたところに、不変の光を見ました。(加藤信朗訳、一七八頁、140, 19—21)

解釈上の難所とらわれる(O'Connell, 123)。qualicumque oculo を、ふたつの supra にかけて読む、数すくない研究者の一人が、O'Connell である(123—128)。省みれば、qualicumque oculo を lucem incommutabilem にかける翻訳が、十七世紀以来今日に至るまで支配的である。その一例として O'Connell が解釈の典型としてあげる John K. Ryan <sup>(19)</sup> の翻訳とその問題点を、かかげておこう。

《I entered there, and by my soul's eye, such as it was, I saw above the same eye of my soul, above my mind, an unchangeable light》下線とイタリックは筆者。

第一点：such as it was (qualicumque) もろまじな言ひ回しである。英語圏の O'Connell ではなく、ドイツ人なごうじょう。ちなみに Kurt Flasch は《so schwach es auch war》(傍線は筆者)と云々。

第二点：above the same eye (supra eundem culum

meum) 同じとはなにか。この目の上には (above my mind) もう一つの目があるのか。

O'Connell は、伝統的な訳の意図をどぎつく！言い換えてみせる。《an eye of my soul of some sort or another [which was] above the same eye of my soul [and] above my mind》(124)

これだと、目がふたつあることになるのではないかしら、しかも、そのふたつの目は同じ目だ！ふたつの異なる目と同じであるとは、なんと奇怪ではないか、というのが、彼の出す疑問である。かれはいう。われわれは通常の眼—reason—によって、走行を開始する。しかしあるところでキアをあげる。ヌースが通常の目に代わって、われわれの mind に、ヌース自身を見る力を与える。In lumine tuo videbimus lumen (『詩篇講解』三五・一〇) こういう思想が、このパラグラフの背後にあるとみる。加藤信朗は、この一節の背景についていう。「プロテイノスの哲学では、『魂』に内在して、『魂』を根拠づけているものは『理性』です。そしてこの『理性』を根拠づけるものが『一そのもの』です。《わたしの魂のちる目》qualicumque oculo animae meae》と云われるもの、この魂の目を

言っています」。一七六頁。この解釈の難所をどのように越えたらよいか。ここで急いで〈正解〉！をさがすことを控えよう。筆者にとって O'Connell の問題提起 (123—129) は、新鮮であり、なによりもショッキングですらあった。何気なく大方の解釈に沿って読んでいる。しかしじつは、濃霧にかくされたまま、あやうい水河の上にいるのかもしれない。テキストを読む、という基本的な作業に、いっそう注意深くならなければならないことを教えられた。ここに《見ました》(Vidi) と現在完了形で生き生きといわれていることに注意したい。

**C** それ(光)は私の精神の上にあった。しかし油が水の上にあるとか、天が大地の上方にあるとかのような、そういうしかたではなく、光は私を造ったから私よりも上にあり、私は、それ(その光)によって造られたのだから、それよりも劣るのでした。(訳は筆者。加藤信朗は省略、140, 26—29)

この場合 *super* は、なにをしめすのか。それは製作者の制作物にたいする優越、*lux* と *mens* の上・下という空間的な位置、知的な相互関係 *intellectual relationship* (O'Connell, 128) を示すのか。du Roy は「プロティノ

スから借りた目と光のイメージは、プロティノスの分有よりも、はるかに徹底した依存性を示す *factitive* の指標によって訂正される」と見る (174)。この事実性への指摘は意味深い。一見めだたないズラシ、ないしは転調は、きわめて重大な変更を秘めている<sup>(13)</sup>。

**D** 真(まこと)を知る者は、光を知り、光を知る者は永遠を知る。おお。永遠の真よ。真なる愛よ。愛すべき永遠よ。(訳は筆者。加藤信朗はこの箇所を省略)

美しいイメージにあふれる三一性の賛歌。ここに *scire* が神に属する働きとして三度現れる。du Roy は「この照明は三一性に向かって超えてゆく。むしろ、降下する (*plonger, 74*)、<sup>(14)</sup> というべきか。なぜなら、それがいたりつく先は、神聖なる三一性のヴィジョンでなくて、認識におけるコミュニケーション<sup>(15)</sup>、<sup>(15)</sup> という。垂直の上昇運動であるよりも、認識の円環的な循環、内的交流、すぐれた意味で水平的な円盤の面の上を循環する運動である。気づいてみれば、おのれの正面にいるあなたにむけての告白が、胸底からおのずからあふれるようにほとばしる。Tu es deus meus. Tibi suspiro die ac nocte. suspirio」という根源的な言葉が、見ることのかなたへと向

かって、エンジンを始動している。それは、いつのまにか視覚的な用語圏をでている。

[E] はじめてあなたを知ったとき、あなたはわたしをひきよせて、見るべきものがある。だがそれを見るだけの者にまだ私はなっていない、ということをお示しになりました。(加藤信朗訳、一七七頁、140, 29 : 141, 3)

ここは第二の翻訳上の難所といわれ (O'Connell, 129)、加藤信朗もここを「微妙なラテン語的表現」(178)と見ている。まず、「はじめてあなたを知ったとき」とは、なにを意味するのか。O'Connell は、ふたとおりの見方があるという。ひとつは、なんらかの決定的な出来事 *occurrence* が、生涯においてはじめて (*primum*) 起きたことをさす。いまひとつは、日常的な経験の日付をもつ時間に属する。昨年の夏、初めてあなたにお目にかかりましたね、と言うような場合。知るということは、日常の経験のなかにくみこまれていて、O'Connell は、前者は、この箇所  
の神秘的な、直接的な知識 *acquaintance* であるが、後者は、神があることを知る (to know that God exists) 間接的な認識 (knowledge by understanding) 理解することによる知識である、とつづ。 (To know to

know that) の違いである (130)。

筆者の見るところでは、ここで *cognovi* (*cognosco*) とは、たんに知るという直接的認識でなく、心理学で言う再認の働き (これはたとえば、あなたの時計ですか、と、鉄道の遺失係に訊かれ、手に取ってみて、確かに私のものです、という場合) に属する間接的な認識をいう。だから、あなたをたんに知るのではなく、これまでわかったつもりでいたあなたをあなたとして知る、あなたがあなたであることがわかる、ということをしている。『告白』第一〇巻、冒頭のいのり、*Cognoscam te, cognitor meus, cognoscam, sicut et cognitus sum.* を見よ。これはノエマ・ノエシスの志向的構造を持つ認識ではない。それは逆転する。重層的で対話的な構造をもつ。

[F] そして激しい光線をあてて弱い私の視力をつきはなされたので、わたしは恐れと愛におののきました。(17)。(加藤信朗訳、一七七頁、141, 5—6)

*Et reverberasti... radians in me vehementer.* ここはこのくだりで最高度に劇的な情景。reverberare という語は『告白』においてここを含めて、二度登場する。一度は、『告白』第9巻の終わりに近く、母の死に先立つ数

日のエピソードを記す場面である。同行していたアウグスティヌスの弟が、母をこのまま異郷の地、オステイアに葬るに忍びないので、どうしても故郷アフリカに連れ帰りたい、と言っていると、思わずモニカはきつとなり、きびしく弟を戒める。「これを聞くと、母は一層心配そうに、弟をきくと、目で叱って…… Quo audito illa vultu anxior reverberans eum oculis」〔告白〕九・一一・二八)目で叱り、しりぞける場面である。このわれわれの場面では、光をまばゆく放って弱い私の視力をしりぞけた、という。いずれも視線を描いている。du Roy は《et tu as ebloui.》と訳している。しかしあなたはまばゆく目をくらました(tu as ebloui)。というよりも、ここには不遜なまなざし aspectus へのつよい拒絶の意志を、その奥に隠しているのではないか。見るということとは、単にあなたの視力は1、2ですとか、0、3ですなどと、視力検査で検査医師がいうような、視力の強度をいうのでなく、見るという知的なはたらきの奥に、欲望や、意志や、涙や、時に視線の快樂をすら、隠している。このようにみてくると、infirmi-tatem aspectus mei を、単に視力の弱さだけにでなく、重い目の病気に結びつける、一見強引とも思われる

O'Connell の解釈 (134) も、可能な解釈として理解できるのではないか。『告白』七・七・一一には、《Et tumore meo separabar abs te et nimis inflata facies claudibat oculos meos》(だが、わたしの腫瘍のせいで、あなたから遠ざけられていました。しかも腫瘍によって、あまりにもふくれあがった顔は、わたしの目を閉ざしていたのです)、とある。加藤信朗は適切にも「ついで〈見た vidi ということ〉と〈目が眩んで何も見えなくなった〉ということとは同じひとつのことです」(二七九―一八〇頁)といっている。これまでわれわれは、見るという経験を追ってきた。けれどもここにいたって、見ているが、見ていない。見れども見えず、という盲目という現実の自覚の事態に逢着したのである。

《Oculi membra sunt carnis, fenestrae sunt mentis; interior est qui per has videt; quando cogitatione aliqua absens est, frustra patet》目は肉体の肢体(器官)であり、目は精神の窓でもある。これら(肉眼)によって見るもの(精神の目)は、肉体の目よりも内側にある。(目が)ある種の cogitatio を欠くとき、それは開いていても(ただ開いているだけで)むなし。(詩篇

講解』四一・七一カッコ内は筆者)

視覚の上では開いていても、盲者なのである。では目の見えない目で見るためには、どうすればよいのか。めしいたトビアスのように、見ることのかなたへ移るには、どうすればよいのか。盲目の目に、ななが接木<sup>19</sup>されればよいのか。次の第二章でこれを論じよう。

## 第二章 聞くことへ

### 第1節 肉の層

ここで『告白』七・一〇・一六の後半部にはいる。見ることから聴くことへと舞台は回る。見ることから聴くことへと移るにあたって、通過する境域がある。それは肉の厚い層である。

**G** としてあなたからはるかにへだたり、似ても似つかぬ境地<sup>20</sup>にいる自分に気づきました。そのときはるかに高いところから、《私は大人の食べ物だ。成長して私を食べられるようになれ。食べるといっても、肉体の食物のように、お前が私を自分のからだに変えるのではない。逆にお前が私に変わるのだ》という御声を聞いたように思いました。

た。(加藤信朗訳、一八〇頁、141、7—12)

激流に流されて、へはるかに高いところから de exce-  
150)、滝壺にまっさかさまにもんどり落ちた、というイメージである。まさに、見ることから開幕した物語が、聴くことに移行し転換する一場面として、ここは注目し値する。du Roy は、このパラグラフをミラノの経験の核心、「最高峰」として位置づける。「このとき (E)、神はアウグスティヌスに介入する。アウグスティヌスが、この神秘的な出会いの頂点を位置づけなければならないのは、まさしくここである」(80)。それはなぜか。キリストがこれかわれわれの食物になる、お前が私に変わる、という声を聴いたからである。もはや、はるか高みにむかって超越することによって、仰ぎ見るべきへ一つのものが、向こう側から下降する。食べるという、厚い肉の層を通して、われわれに介入する声が聞かれる場所が、ここにある。それは本質直観ではない。それはイデア化された視覚的な言語という領域を越える。それは野性の言葉に属する世界である。

**H** (第一段) そこで私は不義のゆえにあなたが人間をこらしめ、自分の魂をあたかも蜘蛛の糸のように消してゆ

かれるのを感じて「真理などというものは無いのではなからうか。それは有限の空間にも無限の空間にもひろがっていないのだから」と言いますと、あなたははるかかあなたから「とんでもない。私こそは在るものだ」とさげばれました。(加藤信朗訳、一八二頁、141, 12—17)

[H] (第二段) その声を私は、まるで心に聞くように聞いたのです。そして、疑いの余地は全くなりませんでした、造られたものを通して悟られ、あきらかに知られる真理の存在を疑うよりはむしろ、自分が生きていることを疑うほうがやさしかったでしょう。(加藤信朗訳、一八二頁、141, 9—21)

これは神と魂の対話である。—私が言った dixi。真理などというものは無いのではなからうか。それは有限の空間にも無限の空間にもひろがっていないのだから。—あなたは叫んだ et clamasti。とんでもない、私こそは、在るものだ。 dixi は内心の呟きであろう。神はひとの心の言葉を見る。『詩篇講解』四一・一七に、ゲッセマネの叫びを示唆するコメントが見られる。その一節を紹介しよう。

[I] (第一段) *Dicam Deo: Susceptor meus e: quare mei oblitus es? Sic enim hic laboro, quasi tu oblitus*

*sis mei? Excerces me: et novi quia differs me, non mihi auferes quod promisisti:...* 私(鹿に擬せられている詩人)は神に言おう。あなたは私を支える方です。(それなのに) どうして私を忘れたのですか。ごらんのように、私は地上で、あくせく労苦しています。まるで、あなたが私のことを忘れ果てたかのように、です。でも、あなたは私を鍛えているのですね。あなたが私を遠ざけることは、とうに気づいています。あなたは、あなたが約束したことを撤回されることはない。『詩篇講解』四一・一七—訳とカッコ内は筆者)

第一段では、詩人は、なぜ私を忘れたのですか、と神に向かってせまっている。詩人は異邦人の敵から、お前の神はどこに在るのか、としつこく言われるが、神を目に見えるように示すことは、とうていできない。敵にあざけられて、詩人はあせる。けれども、あなたが約束を守る方だ、ということへの信頼をいまだにたっている。

[I] 第二段 *Tamquam de voce nostra clamavit et caput nostrum: «Deus, Deus meus, quare me dereliquisti?» Dicam Deo, Susceptor meus es: quare mei oblitus es? あたかもわれわれの声から(発したかのよう*



に)、また、われわれの頭から発したかのように、われらの主は叫んだ。〈神よ。わが神よ。なぜ私を見捨てられたのですか〉。私は神に言おう。あなたは私を支える方です。と。『詩篇講解』四一・一七一訳は筆者)

Tantum de voce nostra clamavit et caput nostrum と言われていることに注目しよう。鈍いのも、ほどほどにせよ。これは賛美などではない。孤独な靈魂の絶望の絶叫なのだ、と、近代の鋭敏な魂のひとりであるアンレ・ジッドは、たしかある断章で悲痛な調いで述べていた。だがその叫びは、耳を傾けて聴くとき、われわれ一人一人の心のなかへと、呼びかけてくるのではないか。それはかぎりなく哀切に響く。それはわれわれのために発せられた、とアウグスティヌスは、みている。この叫びはイデア的な言語のかなたにあり、野生の言語のいのちがほとばしる。

「Immo vero ego sum qui sum」とは、『告白』を書いているときの、彼のいわば解釈を述べる言葉なのである」と加藤信朗はいう。これは、記述の歴史的眞実性の問題である。しかし、筆者は、ここでは、それよりも、アウグスティヌスがここで、なにかに触れ、なにかの声を聴いていることに、関心をよせている。そうでないと、『告白』

七・一〇・一六の心臓部が、なぜか急にしぼんでしまうように思われるからである。わたしは du Roy の解釈<sup>(23)</sup>に惹かれていた。「オーディション(聴くこと)が、ヴィジョン(観ること)のさしだすボタンをうけとる。……眞理の発見が、さまざまなたしかさの順序を逆転する」(31―カック内は筆者)。

さきの見る経験を述べるくだりでは、見るという経験は、中川純男が指摘するように、判断の確実性を保証するものであった。しかし、このあきらかに知られる眞理の存在(non-非存在)を疑うくらいなら、むしろ自分が生きていることを疑うほうがやさしかった、という声の経験においては、確実性の根拠は根底から逆転する。その確実性の根拠は、こちら側にはない。向こう側に移っている。

では、心の奥底において叫ぶあなたの声を聞くとは、どういうことか。声を聞くとは、音響 sonus。そして意味のない音声 sonus を聞くことではない。意味のある音、それが声 vox である。ドビュッシューのオペラ、ヘレラスとメリサンドの第四幕・第四場においてきかれる肉声のささやきに、しばらく耳を傾けよう。ペレアスのかたかりかける《Je t'aime》に、メリサンドはこたえる。《Je t'aime

aussi) けれどもその声は、よほど耳を澄まさないと思き取れないほどの、かすかな声で歌われる。ワグナーだと、ここでいっせいに器楽が、高らかに奏でられるだろう。しかるに、ここではすべての器楽が沈黙を守る。それはなぜか。それは沈黙の底から浮び上がる声だからである。声は沈黙の海にうまれる。ここで聴いたのも沈黙の声であった。et clamasti longinquo について、加藤信朗は、<sup>(25)</sup>「何か驚くべきものがある、ということをおあなたは私のこころの奥底で叫んだ、ということが書いてある」と言う。筆者は、この透徹した存在論的な言語論を秘めた解釈に教えられた。それではなぜ、この神秘経験を述べるくだりの末尾において、ロマ書一・二〇がはじめて登場するのか。

## 第二章第2節 ロマ書第一章20節の引用

『告白』七・一〇・一六の末尾に、ロマ書一・二〇が引用されている。ここでもう一度、さきを読んだテキストのひとつを写して、振り返ることにしよう。

[H] (第二段) 「その声を私は、まるで心に聞くように聞いたのです。そして、疑いの余地は全くなかりましたの

で、造られたものを通して悟られ、あきらかに知られる真理の存在を疑うよりはむしろ、自分が生きていることを疑うほうがやさしかったでしょう」。(加藤信朗訳、一八一頁) なぜ第16節の、それもようやく、末尾において per ea, quae facta sunt, intellecta conspiciunt (ロマ書一・二〇) が引かれているのだろうか。これについて du Roy は、ラディカルなコメントを記している。「かれ (アウグスティヌス) は、被造物によって神に到達したことを想起するためにロマ書一章二〇節を喚起しているのではない。かれが神の確かさに到達したのは、世界の存在によるのではなく、断じてない。……ロマ書一章二〇節は神秘的な飛揚の物語を、世界の新味をもたない考察に方向を転じさせる還元主義的転換点 la charnière redactionnelle である」(81)。<sup>(81)</sup>なるほど次の17節の冒頭(141, 7: 『告白』一一・一七・二二)の書き出しで、アウグスティヌスはこういう。 et inspexi cetera infra te: 「それから私はあなたの下にあるほかのものに目をやった」(訳は筆者) あたかも頂上から見下ろして (infra te) 下山を始めようとする気配である。なるほどロマ書一・二〇は、方向を転換するさいの〈転轍機〉(du Roy, 81, 4)の役目を演じている。

これと異なる角度で興味深い見解を示すのは、O'Connell である。faciliusque dubitare vivere me quam non esse veritatem. 真理が存在することを（この本文の non は余分だと O'Connell はいう）疑うくらいなら、私が生きていることを疑う方がやさしい、という。この言明の確実性は、7に3を加えると10に等しい、という普遍的な命題のそれとはちがう。「なぜかといえば、私がある、という命題は、偶然な事実性の次元において真であるからである」(140)。だから私があるのなら、神が実在する、という命題は、間接的にしか、真とはいえない。この推論はあくまで抽象的である。しかしこの言表は、イメージを喚起する。それは被いをすかして見える心象風景である。このイメージを捉えるための一番の近道は、ロマ書一章二〇節の引用からやりなおすことだ、という(140)。論理化がむずかしく、イメージでしか、ものが言えないときに、アウグスティヌスは、すかさずロマ書一章二〇節をかっぎだす、というのである。とはいえ、このパラグラフが O'Connell のような推論にもとづいているかどうか、大いに疑問である。かれのこころの耳朶をうった、ego sum, qui sum という声を聞いたことは、それが、推論という回路を経る

ことなしに、それだけで、疑いを超えるということの端的な表明であったのではないか。

## 結 論

われわれはこれまで『告白』七・一〇・一六を、すこしくゆるやかに読んだ<sup>(27)</sup>。このテキストを中心に、視覚的な経験を超える動きを追った。

そこで、見る、の奥に見出したのは、たんにイデア的に知る、ということではなく、あなたをあなたとして知る、ということであった。

## 注

- (1) このテキストの価値を見出したのは André Mandouze である。かれは『詩篇講解』第四一篇とミラノの経験<sup>(23)</sup> 24、25) とオステリアの経験を精細な les parallèles textuels の方法によって比較検討した。Saint Augustin, L'Aventure et la Raison de la Grâce. Chapitre XII. 1968, Paris.

- (2) アウグスティヌスの『詩篇講解』第四一篇は四一〇年の復

- 活節になされた。従って『告白』刊行の時期(三九七年から四〇一年の間、三九七年に近く)から十年余の歳月が、流れてゐることになる。この詩は受難節の期間に教育を受けた洗礼志願者が洗礼盤に向かつて行進する間、歌われたとされる。*Expositions of the Psalms, The Works of Saint Augustine, A translation for the 21st Century*. III, 16, 239, note 5. Translated by Maria Boulding. (New York, 1999).
- (3) 視覚的言語の定義に「こゝには、こゝでは立ち入らなう。」
- (4) ① in quem intellectu ② intellecta' conspiciuntur.  
 ③ intellegendi fontem ④ lumen' fons' intellectus  
 ⑤ omnis qui intellegit' luce quondam non corporali, non carnali, non exteriore' illustratur ⑥ qui non intellegit quondam lux intus ⑦ obscurati Intellegentia.  
 こゝにかかげた七つの用例のうち、①の intellectus は意味、意図。④の intellectus は神に帰せられるほかは、いずれも人間の理解力にかかわる。
- (5) 所雄章のちみつま報告によると、デカルトの『省察録』において、見る、視る、あるいは観るにかかわる用語例 (aspicio, intueor, conspicuous, respicio, inspicio, circumscripio, video) が頻繁にあらわれる。これとつながりの深い認識にかかわる用語も同様である。scio, cognosco, agnosco, nosco, percipio, concipio, intelligo, comprehendo, amplector, complector, comprehendo, apprehendo など。所雄章『デカルト〈省察〉訳解』(二〇〇四年、東京)

一四二頁―注3、一四六頁。すくなくともこのかぎりにおいてアウグスティヌスと近い。

- (6) 加藤信朗『アウグスティヌス《告白録》講義』(二〇〇六年、東京)。

- (7) 以下『告白』七・一〇・一六の引用原典は M. Skutella, *Bibliotheca Teubneria* (1934; 1981' Stuttgart) にある。  
 B の引用のみ原文をかかげる。数字は頁と行数を示す。

- (8) Olivier du Roy, *L'intelligence de la Foi en la Trinite selon Saint Augustine*. Genèse de sa Théologie trinitaire *jusqu'en 391*, (1966, Paris), 72—81.

- (9) Robert J. O'Connell, *Image of Conversion in St. Augustine's Confessions* (1996, New York)

- (10) R. John K. Ryan, *The Confessions of St. Augustine* (1960, Washington) 170.

- (11) O'Connell は、重要な関連箇所として『詩篇講解』三五・一四・一五・『ヨハネによる福音書講解』18、10・21、4・40、5、『告白』一三卷四六、四九、五二を、あげている(125)。学会の席上、加藤信朗からこの『ヨハネによる福音書講解』18 について貴重な示唆をいただいた。

- (12) 加藤信朗「超越としての魂の愛知の運動は魂の内への顧向と、上への顧向として行われる」哲学の道―初期論文集、一九九七、東京、三九七頁。

- (13) 加藤信朗は、不変の光によって私が造りだされたというぐだりにふれていう。「これらの言葉はプラトンの書物を読

- んだときにすぐ分かったことを述べているのではなく、その時のことを思い起こしながら「いま」これを述べているのである」(一四一頁)。
- (14) *scire* のこういう用法をふくめての仔細な検討は、さけて通れないが、他日に譲る。
- (15) *du Roy*, 74.
- (16) *élever* 高めて。子供を父親が首に巻いて肩に乗せ、タカイタカイをするしぐさか。
- (17) 荒井洋一から、恐れと愛のいずれに力点があるのか、という質問を、発表者である田内千里と筆者両人に、いただいた。田内千里は前者に、筆者は後者に力点を置く、と答えた。今回のわれわれの論点を結ぶ、まさに扇の要に的中する、問いであった。しかし、所詮は、どちらかに力点を絞ることはできないのかではなからうか。
- (18) 括弧は筆者。Simonetti, Boulding, *Augustine, sur les Psaumes I, Du Psaume I au Psaume 80*, (2007, Paris) 648. いずれも一致して、雑念に思いがいはいになってととるが、何らかの思考を欠くときは、精神の窓は無駄に開いている、ととる塚正憲訳に傾く。absens (absun) は *ablative* をとることからである。ただ、ここできかなる〈ある思考〉を意味するのか。さだかでない。
- (19) テリダのこころゆく表現。greffe de l'oeil, Jacques Derida, *Memoire d'Avengle, L'autoportrait et autres ruines*, 1999, Paris, 10. めしいたトピアスが見たものはなにか
- を取り上げる今回予行し、果たせなかった約束の課題については、近い将来にゆずる。
- (20) 「これはプロティノス哲学の述語です。(エンネアデス) 一・八・一三)。「それは一そのものとは似ても似つかない〈多なるもの〉である物体的な場所に魂が置かれているということです」(加藤信朗、前掲書、一七九頁)。
- (21) 以下、テキストは *Sani Agostino Commento ai Psalmi a cura di Manlio Simonetti*, 1988 による。
- (22) 《L'audition relais de la vision... La découverte de la Verité renverse l'ordre de la certitude》(81). すくなくとも一六節は、同じまとまりのあるものと考える。
- (23) 第七卷一六節は、その全体が原体験の時期のものであるのに対して、一七節から二六節にかけては、一体験の記述が二度、ないし複数の時期にあらわれるとしても、また、主題が微妙に変わるとしても一二次的な哲学的反省を加えたものではないか、と筆者は見ている。なお断定できない。
- (24) 中川純男「アウグスティヌスにおける確実性の概念」、『パトリスティカ』第9号、(二〇〇五年、東京) 一三七頁。「表現の上では主語と述語を区別し、判断ないし命題の形で表されるような内容を、いわばひとつのこととして〈見る〉と言う経験が、〈神を見る経験〉であった、と考えられている。『告白』第七卷の certus sum は、それに先行する *vidi* 〈見た〉(『告白』七・一〇・一六)……によって保証された確実性である」。この *Ego certus sum* は注目に値する。討議

の中で、聖心女子大学のキャンパスでカバを見たという例を引くくだりは、ユーモラスでもあるが、深い問いかけを含む。

(25) 荒井洋一の興味深い読解にもとづく報告にひき続く、参加者の白熱した討論の中で、加藤信朗と荒井洋一は、叫び *cry*、*mare* と呼びかけ *invoke* の問題を論じ、その際、両者は慧眼にも、ともにゲッセマネの叫び（詩篇22、2・マタイ、27、46）に触れている。『パトリスティカ』第9号、(二〇〇五年 東京)。

(26) 佐藤真基子は、ロマ書一・二〇の引用を主題化し、それだけでなく、引用の前提をなす問いの構造に着目した。佐藤真基子「造られたものを通して知るとはいかなることか—アウグスティヌス『告白』第10巻、6章—」パトリスティカ、第10号所収、(二〇〇六年、東京) 八—一九一。『告白』第9巻、第10章25節には、佐藤の取り上げた *par* とは、おそらく表と裏の関係になる *sine* が登場する。われわれは、この豊かなひろがりをもつ問題の今後の深化に、期待を寄せるものがある。

(27) われわれは、さきに予告したオステリアの経験（『告白』九・一〇・二三—二五）の検討に、はいることができなかつた。これについては他日にゆずろう。